〔所内研究発表会発表要旨〕

景雅について

研究生　増山　賢俊

仁和寺華厳院景雅（一一〇三～一一八七～一一八九？～）は、高山寺所蔵『華厳血脈』において、明恵房高弁の華厳教学の師にあたる。『尊卑分脈』によれば、村上源氏源顕房（堀川天皇外祖父）流の出自で、父は権大納言源顕雅であり、第十代東南院主覚樹の甥にあたる。「仁和寺華厳院」を以って知られ、仁和寺僧の如く思われている。華厳教学に通じ、華厳宗長者となった人物である。また、『血脈類集記』によれば、中川上人実範の弟子であり、光明山寺において、覚樹や実範の元で多くの密教文献を書写した。弟子に文泉房朗澄があり、勧修寺に共に住し、彼によって石山寺に景雅の蔵書が運ばれ、多くの景雅所持の聖教が残されたとされる。石山寺に残る景雅書写・伝領の聖教写本は、『石山寺の研究』として公刊された目録によって知られる。

景雅は実範より、中院御房明算につながる中院流と、直接厳覚につながる小野流を受法していることが知られる。また同時に、実範を経ずに、「厳覚――静誉――宗観――覚暹――慶雅」とつながる石山流静誉方（あるいは石山流）の血脈があり、小野流の別系統を覚暹から受法していることが知られ、景雅は、それらを石山寺朗澄に授けている。

本稿では、『石山寺聖教目録』に掲載されている景雅の書写・伝持本に注目し、景雅が仁和寺僧ではなく、東大寺僧として活躍したこと、華厳僧より真言僧としての性格が強いこと、義天版『高麗大蔵経』との関わりについて論及した。

東大僧であった論拠の一つは、景雅の書写・校合本の多くに、東大寺三論宗点が加点されており、このことは、東大寺僧として出発したことを示す。景雅の初期の活動拠点は、東大寺別所である光明山寺であり、その後活動の場を、勧修寺、仁和寺等に広げてはいるものの、晩年まで光明山寺においても書写を行っていたことが挙げられる。また、六六歳の時に「東大寺僧弁深田地売券」の署名に「東大寺華厳宗法橋上人位」としていることからも、生涯東大寺僧であったといえる。

また、石山寺に残された聖教を見ても、石山寺が密教寺院であるという性格を考慮に入れても、大半が密教聖教である。顕教聖教においても『三十帖策子』に収載されている経論を書写・校合しており、華厳僧である以上に真言僧としての性格が強かったといえよう。

景雅が義天版『高麗大蔵経』と関わりを持っていたことは、先行研究で指摘されているが、書写した場所は光明山寺である。景雅の義天版に関わる所持本は少ないが、当時最新の文献である義天版に接触・書写できた可能性のある

学僧と言える。ただし、景雅の見た義天版が一切経の全体であるのか、あるいは覚樹によって請来された、一部分のみであったかはにわかに判断が難しい。